

第2回復興ノウハウ講演会「【語り部育成講座】震災を紙芝居で伝える」開催結果報告

第2回講演会の開催概要

第2回講演会のテーマは、「【語り部育成講座】震災を紙芝居で伝える」で、地域・組織・世代を超えて受け継がれるべき“語り部による伝承の講話”を体験するプログラムとした。

講師には、福島県浪江町に拠点を置く「浪江まち物語つたえ隊」の語り部で「O CAFÉ」(オカフェ)店主の岡洋子(おか・ようこ)氏をお招きした。岡氏は、結婚を機に浪江町の農家に暮らし、東日本大震災後は4年間、借家で避難生活を送られた。震災発生後に広島の方が「心のボランティア」のため紙芝居を持ち込んだことを機に、もともと自身も婦人消防団に所属していた際に紙芝居を使い、火事が起きた時の逃げ方等を子どもたちに説明した経験も踏まえて、仮設住宅を巡るなどして紙芝居による語り部活動を長年続けてこられた。2014年に「浪江まち物語つたえ隊」に参加。多様な題材で伝承の紙芝居を制作・上演されている。

なお、本講演会での紙芝居上演に際し、岡氏と共に浪江まち物語つたえ隊で長年にわたり語り部活動を続けてこられた八島妃彩(やしま・ひさい)氏のご好意により、岡氏と八島氏の共演が実現した。

(フライヤー)



- 日 時：令和7年10月30日（木）14:00～15:30
- 講演者：岡洋子 氏（浪江まち物語つたえ隊 語り部）
(共演者) 八島妃彩 氏（浪江まち物語つたえ隊 代表・語り部）
- 対象者：被災地等で伝承活動に取り組んでおられる団体はもとより、そうした団体を支援・連携する立場におられる機関や、将来語り部になることを目指している方、教育関係者、マスコミ関係者、学生、震災の教訓や防災に关心を持っておられる個人など
- 参加費：無料
- 当日次第：14:00 開会挨拶
14:05 講演（紙芝居上演を含む講話、岡洋子氏・八島妃彩氏、質疑応答あり）
15:30 閉会
- 実施形態：ハイブリッド開催（リアル、オンライン=Zoom）

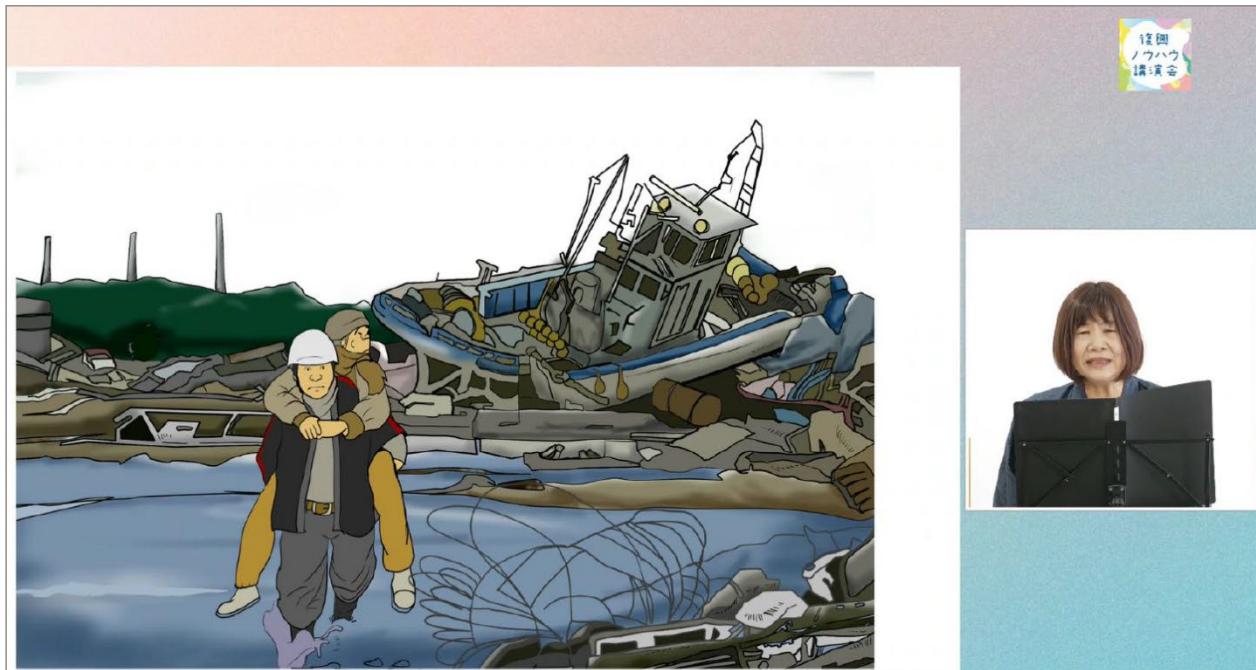
講演内容

紙芝居上演に先立つ岡氏の講話（概要）：

- ・2011年3月11日、東日本大震災、大津波、原発事故、震度6強、15.5メートルの津波、651軒の家が壊れた。私たちはその体験をどんな形で残そうかと思いながら、いま紙芝居活動をしている。
- ・浪江町のために何かしたい、避難中もずっとそう思っていた。記憶はどんどん薄れていく。その記憶を紙芝居という形に残し、それを通じて人々に伝える活動を始めた。一人でも助かる命があれば、この紙芝居を通してどこにいっても伝えたい。
- ・衣食住の全てを失った時、何からしてよいのかわからなかった私たち。だからこそ、皆さんにお伝えしたい、「当たり前はないのだよ」と。学校がある、会社がある、家族がいる、家がある——私達は自分の暮らしがずっと続く気がしていた。でもそれは当たり前ではない。
- ・ゼロになった浪江町民。けれどいま10年以上が過ぎ、70人の子供たちが元気な声で学校に通っている。ゼロになっても、皆が手を取り合えば、少しずつでも前に進む。家も学校も職場も全部失ったけれど、でも命がある。この命を無駄にしてはいけない。だからこそ、私たち体験した者が後世に伝えていかねばいけない。
- ・明日もしかしたらここに大きな地震が来るかもしれない。家族とぜひ話し合って欲しい、職場で話し合って欲しい、地域で話し合って欲しい。14年前はガラケーが頼りで何人の人たちと連絡が取れなかったが、今は色々な手段がある。まずは命を守ること、そして出来る避難をすること。大きな津波がきた時は自宅に戻ってはいけないということ。そういうことを私たちは今、紙芝居で伝えている。
- ・私たちは贅沢なことはいらない。普通でよい。でもその「普通」、「当たり前」がなくなってしまった。これから私たちが出来ることは、皆さんと手を取り合って、ちゃんと震災を伝えて後世に残して、皆さんに何か役立つことがあればよいと思い、紙芝居をしている。
- ・多くの方々から応援もらっている。浪江まち物語つたえ隊は小さな組織だが、伝えたいという想いがある。大切な命、皆さんどうか生きてください。そんな気持ちで紙芝居を上演させていただく。

紙芝居上演（演目）：

- ・「浪江消防団物語 無念」
- ・「おふくろ」（共演：八島妃彩氏）



※「浪江消防団物語 無念」より。右上の顔写真は講師・上演者の岡氏。（オンライン配信画像）



※ 講演の模様。立って講話している岡氏とその横に着席している八島氏。（会場内で撮影）



※ 岡氏による紙芝居「浪江消防団物語 無念」の上演の模様。（会場内で撮影）

質疑応答

① 語り部としての自身のあり方について

Q：語り部として、大切にしていることは何ですか。

A (岡)：私は浪江町の震災の話を語り部としていますので、真実を伝えること、自分が体験したこと伝えること、きちんと見て聞いたことを伝えることを大切にしています。そして、知らないことは知らないと正直にお話します。私達もまだまだプロではありませんので、自分で出来る話になるのですが、一生懸命に答えさせている、話をさせてもらっているのが語り部だと思います。

Q：被災体験は想像を絶するほどつらいものであり、普通なら、思い出したくないものとして胸の内にしまっておくものだと思います。それでも敢えてそれを語ろうというお気持ちちは、どこから湧いてきたのでしょうか。

A (岡)：震災当時、宮城県にいて津波を見ました。命が危ないと思いましたが、家族全員が大丈夫でした。家は海の方ではなかったので、大丈夫でした。その中で浪江町のために何かをしたい、何か出来ることはないのだろうかとずっと避難中考えていました。紙芝居に出会って、紙芝居を伝える手段として、私の中に居場所が出来ました。薄れていく恐怖を記録として残して、子供から大人まで命の大切さを伝えたいと思っています。だから話せない人の分も私たちが語っていかねばならないと思います。故郷を離れてみて、更に故郷が好きになりました。なんにもなくなってしまった浪江町ですが、誰かが後世に残していくなければ、浪江町のことを語っていく人がいなくなるのではないか。私たちはたまたま紙芝居という形に出会いましたので、ずっと伝えていきたいと思っています。これからも頑張っていきたいです。

A (八島)：私自身の紙芝居を作つて頂いたこともあります、直接話す語り部は難しく、紙芝居を作ることになり取材などを受けて、少し話せるようになりました。自分のことというのはなかなか話すことが難しいです。紙芝居を通して自分のことを語れるようになりました。

Q：どんな想いでこの取組をし続けているのかということや、この取組をされていること自体がご自身の人生にとってどんな影響があると感じているか伺いたいです。

A (岡)：東日本大震災、大津波、原発事故、避難の実相は十人十色に違います。私達も家族で必死に逃げました。震災後、どのようにして暮らしていこうか、後悔しない生き方をしたいと思いました。避難しているのに、衣食住の全てを失ったのに、何かをしなければいけない思いが湧き出てきました。紙芝居を通して、全国の皆さんとご縁が繋がりました。寝袋を持って東京から私の倉庫に手伝いに来て下さった方もいらっしゃいます。こういうことを知らずに人生が終わるかもしれませんでした。大震災は私にとって、第三の人生だと思っています。この人生を絶対無駄に生きたくないと心の中で決めて

います。若い人にも震災を知らない子供たちにも私達なりの言葉で伝えて、そして大人の先輩の人たちにも寄り添えればよいなと思います。だから紙芝居に出会えて嬉しく思っています。

A (八島) : 紙芝居の語り部をしていなかつたら出会えなかつた人達が沢山います。全然知らない日本及び外国人と出会い、いまでも繋がっています。震災の時はどうしようと頭が一杯でしたが、紙芝居に出会つてから自分の心の重しが少なくなつていったと思います。

Q : 私が住む広島では、取り壊す予定だった原爆ドームを様々な議論の末、残すこととしました。現在では、残したことが多くの人に実相を理解してもらうことに大きな役割を果たしている、という声を一般の人からはもちろん、行政からも聞きます。岡さんらにとって遺構はどのような存在でしょうか。

A (岡) : 広島には紙芝居を作つてくださいましたいくまささんがいらっしゃいます。私たちも原発ドームに行きました。私にとって遺構とは、浪江町で暮らした生活、風景、全てのものが遺構だと思っています。請戸小学校がいま震災遺構として残っています。紙芝居を通して次の世代に何年も何十年も継承していきたいと思っています。目に見えない放射能との闘い、これは言葉でもずっと伝えていかねばならないと思います。

A (八島) : 岡さんは請戸小学校を震災遺構として残す委員会のメンバーでしたから、特に思いが強いと思います。私達は広島のように一面焼け野原になった訳ではないですが、建物解体ということで浪江町の多くが更地になり、何にもない状態になってしまったという点では同じです。これからどんどん新しい街に変わっていくと思いますが、かつて浪江町はこうだったのだよと皆さんに分かってほしいです。

② 語り部活動の条件・資質について

Q : 直接的に被災体験をしたことがない人でも、語り部になれますか。

A (岡) : 14年前に起きた東日本大震災、大津波、原発事故は本当に全ての人の心の隅にあると思います。被災地に行って人と話し、寄り添うことが出来れば、私は体験をしなくても、私たちとは違う目線で語れるのではないかと思います。後世に伝えるに当たって、体験しないけれども福島を思うこと、被災地を思うことは大切だと思います。

A (八島) : 私たちは紙芝居を通して震災の体験を語っています。私たちは代弁者だと思っています。自分自身の紙芝居も作りましたが、その他は全て他者の体験の話です。体験者の方々に直接お話を聞きして勉強して語っています。今年、町の公民館で語り部教室を始めましたが、町民以外で浪江に移住してきた人もその講座のメンバーに入っています。

Q : 語り部活動を継続していくため、活動を止めないため、必要なことは何でしょうか。

- A (岡)：東日本大震災、大津波、原発事故を他人事ではなく、自分事として考えてもらうように伝え続けていきたいと私達は思っています。継続していくためには、福島県、浪江町、岩手県、宮城県などがそれぞれ違う体験をしていると思いますので、そこでの語りはその人しか分からぬことがあります。絶対無理をしないで、永く続けていくには正直に話していくことが大切だと思っています。
- A (八島)：メンバーそれぞれ、語り部活動以外に自分の仕事などがあります。ですので、仕事に支障がないように活動しています。震災から14年経っていて私達も年を取ったねとよく言うのですけれど、体も以前よりも無理がきかなくなっているので、本当に無理をしないで、自分が出来る時にやっています。基本は無理をないです。

Q：語り部の話には「防災・減災の心得」といった実践的教訓も含めるべきでしょうか。かつて消防団におられたお立場から、ご意見をお聞かせください。

- A (岡)：部落では地域防災を立ち上げて、火事・大水などを想定した避難訓練などもしていました。でも、今回の原発事故の避難というのは、それに当てはまらなかつたと思います。私たちの体験を紙芝居で話しましたが、皆さんができる防災というのは家族で話す、職場で話す、地域で話すということです。「家で話す」は、どこに避難する、絶対に自宅には戻らない、どこどこで待ち合わせようということ。学校で、震災を知らない子供たちに紙芝居を通じて何を伝えられるか。学校から家までの間で何が起こるか分からぬ。大雨や地震が来るかもしれない時は大声で大人に助けを求める。職場だったら大きな地震が来たらどこどこに避難すること。地域防災は大切だと思います。浪江町で高齢の方に「逃げるぞ」と言っても、今まで大丈夫だったから今回も大丈夫といった思い込みをしている人がいて、流されてしまったケースが多かったです。だから私達の体験を少しでも教訓にしてもらつて、色々な会話をしてほしい。それぞれの地域・場所でできることを考えてほしい。命を落とすことはだめなのです。命を守ることを前提にして欲しいと思います。

- A (八島)：地震でも豪雨災害でも、「マニュアル通りにはいかない」ということは心がけてください。避難訓練をしたとしても、その通りに災害は起きません。自分で考えて避難することが大切だと思います。

③ 紙芝居による語り部活動の効果について

- Q (会場から)：本日の紙芝居ありがとうございました。脳に胸に、直接伝わってきた気がしています。子供たちに話す紙芝居があると思いますが、共感力・想像力などに効果があると思います。紙芝居を演じている方から見て、紙芝居だからこういう効果があるのだ感じていることはありますか。

- A (岡)：ありがとうございます。婦人消防隊で幼稚園や保育園でやつた時、子供たちの輝いていた目がずっと心に残っています。今日の紙芝居をお家に帰つたら報告してねと

言って、火事があったらこうするのだとよと言いました。紙芝居は、いつでもどんな場所でも出来ます。紙芝居が終わった後、人の心に何かが残り、自分に置き換えてもらい、次に繋がればいいなと思います。たかが紙芝居でも力を持っていて、凄いと思います。1枚1分でお話をします。その1分の中に凄い言葉や景色などが入ってくる。私達は、浪江町を忘れないために昔話もします。自分の地元の話だと喜んでくれる人もいます。

A (八島)：時々小学校に呼ばれて話をします。初めは、原発事故は難しいかな、特に小さい子供には難しいかなと思って始めましたが、先生から感想文ができたので送りますと言われ、それを読んでみると、きちんと内容を分かっていました。その時、紙芝居はいいものだなと思いました。

Q：対面の時と、オンラインの時では、伝わる効果や伝えるための工夫が違いますか。

A (岡)：私達の紙芝居は対面が多いです。最近はオンラインでも少しずつあります。対面でもオンラインでも私たちは変わらず心を込めて上演していますが、対面だと顔の表情を見ながら感じ取れるのですが、オンラインは大丈夫かなという不安は若干あります。

A (八島)：基本は対面です。個人的には、やはり対面ではないと伝わらないように思っています。ただ、コロナ禍以降はオンラインが増えました。オンラインでも良い点はあります。例えば、仮設住宅でアメリカの大学生に向けてオンラインで紙芝居をやりました。私達は浪江弁で紙芝居をするのですが、予め英語で翻訳をしてくれたこともあり、きちんと通じていました。そのように世界に通じる、届くというのは凄いなと思いました。オンラインの良いところだと思います。

④ 紙芝居の制作・使用について

Q (会場から)：私はデザインの仕事をしています。紙芝居のイラスト制作についてお伺いしたいです。この紙芝居は作家さんが創られたと聞いていますが、絵を起こす時、例えば風景であったり、人物の表情であったり、そういうものを描く時にどのようなことに重点を置いたり、こういった表現には気を遣ったといったことがあれば教えてください。あと、制作時に作家さんと絵の描き方についてのやり取りやエピソードがあればお伺いしたいです。

A (岡)：ありがとうございます。紙芝居は、広島県のいくまさ鉄平さんが描いてくださったのですが、何度も何度も浪江町に来て頂き、私たちよりも詳しいぐらい色んな方とお話を来て、調べて、そして形になりました。例えば今日読んだ「無念」はベースに消防団の手記があり、その手記を見て絵にしていかれました。本当に私達に寄り添っていただき、聴き取った言葉を形にしていかれました。

A (八島)：震災後のことですが、大雪で道路が大渋滞になった夜に、仮設住宅の人達がお

にぎりを作つて、渋滞に巻き込まれた車の人達に配つたことがあり、その紙芝居もあります。いくまささんは関西の作家さんなので「命のおむすび」と題名を付けられました。でも、東北では「おむすび」って言わなくて「おにぎり」だよと指摘したら、「おにぎり」に変わりました。また、最初はおにぎりの絵に海苔が付いていましたが、あの頃は海苔が手に入らなかつたということもあり、そこも直してもらいました。柔軟に対応して頂きました。

Q: どうしたらそれだけ多くの講話（紙芝居）のレパートリーを創作できるのでしょうか。
才能がないとできないでしょうか、それとも工夫次第では誰でもレパートリーの幅を広げることができますか。

A (岡)：私達の震災体験を語れば、家のこと、家族のこと、仕事のこと、学校のこと、職場のこと、動物のこと、故郷のこと、花のことなど、全てが物語になります。十人十色の避難体験があります。それらを積み重ねた結果として、これぐらいのレパートリー数になりました。

A (八島)：私達の場合、紙芝居を作家さんに創っていただいたので数が多いです。自分で創作する場合は、取材が大事だと思います。先程もいくまさ先生が、私たちよりも福島を知っているのではないかというぐらい何度も来てくれて、私たちの心の奥まで知っているのではないかと思うほど取材をされました。

Q: 現在持つていらっしゃるご作品を、他の団体の人が使わせていただける可能性はありますか。

A (八島)：紙芝居は私達の財産なので、そこは難しいかと思います。知る限り、ある団体が他の団体に貸すということは基本的にはないと思います。

（司会補足）お互いに上演し合うといった交流の形はあり得るかもしれませんね。

当日資料

- ・岡洋子氏の想いを綴った資料（講演資料からの一部抜粋）

お問い合わせ先

復興ノウハウ講演会開催事務局（株式会社リベルタス・コンサルティング）

Mail: fukko-meeting@libertas.co.jp

Tel: 03-3511-2161

（以上）